

美しい言葉

成瀬政男

せっかくドイツにきたのであるから、専門の研究のほかに、ドイツ語も習いたいと思つて、私はその勉強にとりかかった。

そのころベルリン大学に、ドイツ語研究所というところがあった。私はここへ通つたほかに、また、家庭教師もとつて勉強をさせた。家庭教師の名前をブロッツ夫人という。もう七十歳にとどく年であつたけれども、なかなか元氣な老婦人であつた。若いときは女優であつたとのことで、カイゼルの前でも芝居をしたこともあるし、また一座をくんで、アメリカまでいったこともあるとのことである。いまはラジオの声優を業としてゐる。

初対面のときにブロッツ夫人は、ドイツにきて、ドイツ語を習うからには、正しいドイツ語はもちろんであるが、それとともに、ぜひ美しいドイツ語を学んでほしい。美しい

ドイツ語は、いまは俳優と声優とがうけついでいる。教養のある家庭の人びとは、みなこの美しいドイツ語を学んでいる。外国人ではさぞ苦しいではあろうが、どうぞ、私のこの言葉を、怠りなく学んでくれるように、そしてベルリンのある一部の人の話すような、あのきたない方言だけは、決してまねないようにしてくれと、こんなことを語る。私はベルリンの人々の話す言葉をきかない方言だというブロッツ夫人の話を、むしろ不思議にさへ思つた。

ブロッツ夫人の教授は熱心であつた。それだけにまた嚴格でもあつた。いい発音ができないときには、それができるまで、なんども繰り返かえさせるのである。

ブロッツ夫人の教授は、まずウムラウトの発音から始まつた。ä ö ü の発音を一つずつ、丹念に教えていくのである。夫人は、これらの発音が完全にできるまで、教えぬくのである。何度もくりかえして、ようやくにして発音できるようになつたとき、初めて私を放免してくれる。私が帰るときには、家でもこの調子で練習するようにと注意の言葉をいいながら、文開から送りだす。

その次のおりには、いつも、前に習いおぼえた発音の練習から始める。私はブロッツ夫人の前で、前に習つたところを大声で発音する。夫人は、私の発音をきいたあと、さらにこまかいところの注意をする。ä 一つの発音だけでも、またü 一つの発音だけでも、私には、誠に大変なことであつた。努力とともに多くの時間がかつた。

なんでもないと思つていたr の発音や、子音 p t g の発音なども、いざ正式のことになると、ずいぶんむずかしいものであると感じた。私は、これらの発音にも、やはりたくさんの努力と時をかけて、ようやくブロッツ夫人の氣にいる。美しいという発音にまでこぎつた。

特に私の一番苦勞し、また一番多くの時をかけたものは、r の発音であつた。なんどブロッツ夫人から教わつても、私にはr の発音ができてこない。とうとう最後には、ブロッツ夫人は台所から水をいれたコップをもつてきた。この水を自分の口にもふくみ、また、私の口にもふくませる。そしてこの水でウガイをし、私にもさせる。ウガイをするときの舌の根元の振動、この振動で出る音がr であ

るといふ。この発音は、いまずぐにできるものではない。家へいって怠らず練習をつむようにと夫人はいう。

家へ帰つてから、私は、いわれた通りに練習してみた。なるほど、水を口にくんでウガイをすると、舌の根元が振動してくる。しかしこの振動は、水をたくさん口にふくんだときには出てくるけれども、水の分量が少ないと出てはこない。そこで私は工夫をした。ふくむ水の分量を、毎日、少しづつへらしていく。へらしていくても、舌の根元が振動するように練習する。これを続けていって、とうとうしまいに、たとえ、口にふくむ水の分量が少なくとも、舌の根元が振動するようになる。終りには、ふくむ水がまったくなくとも、根元の振動が自由にできるところまでこぎつた。

ブロッツ夫人の前で、この舌の振動をしてみせた。夫人は、それが本当の美しいr の発音であるという。よくもここまで練習したものであるともいふ。この言葉をきいたときには、さすがに私も、うれしかった。

こんなふうにして、一言ずつ、また一語ずつ、一文章ずつと、次第に、長い言葉や文章

の方へ、丹念に、その練習を続けていくのである。そうすると、自分でできるできないは別として、ドイツの人々の話している言葉の品定めが、少しづつ出来るようになってくる。やはり、ブロッツ夫人のいう通りである。ベルリンの人達だとも、必ずしも、美しいドイツ語を話す人だけとは限らない。なかには美しくない方言を話す人達も見られる。しかし、教養のある人々は、おおかたは、美しいまた正しいドイツ語を話している。

しばらくの後、私はスイスのチューリッヒへいった。ここで専門の勉強のあいまに、ある日曜日のこと、私はチューリッヒの山の手、バッケンホーフ街にある、ベスタロッターの記念館をたずねた。

記念館の入口は広間になつてゐた。その片隅に部厚い一冊の署名帳がおかれてゐる。私は、まず、この署名帳に署名した。

署名帳のわきに、ベスタロッターの生涯に関するたぐさんの絵葉書や、書物をうっているところがある。六十歳をすぎたと思われる老婦人が、ここを守っている。土産物にもなると思つて、私はこの老婦人から、ベスタロ

ッターの絵葉書と書物とを、たぐさんに買ひもとめた。

もとめおわたときに、この老婦人は私に、ベスタロッターのご研究に、いらっしゃつたのですねときくので、いやそうではない、機械工学の勉強にきてゐるのですと答えると、では、いかがでしようか、私が、ベスタロッターの生涯についてお話する、お許をいただけましようかと、物腰やわらかく、またつましく語る。是非お願いしたいものですと答えると、それではといつて、老婦人は、いまもとめた土産物を、私の手から自分の手にうつし、その絵葉書の一つ一つについて、ベスタロッターの生涯をくわしく語つていくのである。

その語る言葉をきいて、私は、これはすばらしいドイツ語であると思つた。なんと美しいドイツ語であるかと思つた。なによりもまず、r の発音である。この発音が、いかにも美しい。それは今までにきいたどの人の発音よりも、はるかに美しいr の発音である。立派なものであると思つて、私は感にうたれた。よく見ると、この老婦人は、その言葉が美しいばかりではない。その眼がまた美しい。

語る口元が美しい。顔の形、体のこなし、これらの全体が美しい。美しい顔に、いきいきとした眼をかかやかせて、玉をころばすような言葉で、教育の聖者ペスタロッチーの生涯を語ってくれるのである。

やがてこの老婦人に別れて、私は階上にあるペスタロッチーの記念品の数々をみた。みおえてそのまま、この記念館をさった。

数日の後、チューリッヒをひきあげようと思つて、荷物を整理していたときに、私は、ペスタロッチーの記念館に、もとめた土産物を忘れてきたことに気づいた。わたくしは、ふたたび記念館の老婦人をたずねた。

老婦人は私をみるやいなや、心から、よかつた、よかつたと、美しい声で続けざまにいう。そして、わきの小包をとつて、それを私に渡しながら、忘れていたあなたの土産物は、今日にでもニッポンに送ろうかと思つて、このように小包にしておきましたというのである。みれば較重に作った小包の上に、私の日本のアドレスが書いてある。これは、署名帳からひろつたものだと語る。

私は、この小包をうけながら、その労と親切とを謝した。そして残らかの金をポケット

からとりだして、これを老婦人の手に渡さうとした。ところが老婦人は、私のさしだした金を、どうしても受けとらうとしない。私は西洋にきて、初めてこのような経験にであつた。これだけのご親切にむくいたい、私のささやかな志を、受けてはいただけないものではないかといへば、この老婦人は、こはペスタロッチーの記念館ですという。ペスタロッチーの記念館では、そのような心配は、少しもいりませんという。私は手をひきこめ、金を自分のポケットにおさめて、この記念館をさった。

ペスタロッチーの死後百年あまり、ペスタロッチーの精神は、いま、この老婦人の心の中に生きてゐる。この心が、この老婦人を、かくも美しくしているのだと思つた。結論があるいは早すぎるかとも思つたけれども、きっと、美しい老婦人のこの心から、美しい言葉がでてくるのであらうとも思つた。

以上の話は、二十年前のことである。私は三年前、再びチューリッヒをおとすれ、ペスタロッチーの記念館をたずねる機会にめぐまれた。当代第一のペスタロッチー学者だとい

われるシターツパッヘル教授が、この館長をしていたので、同教授にあって、私は親しくペスタロッチーの思想についてきくことができたのは好運であつた。

ついで階上のペスタロッチーを記念する各室もみせてもらひ、みおわつて、私は事務室にエグリー事務長をたずねた。かつての美しい老婦人の、その後の様子をききたかつたからである。エグリー事務長は、その老人ならば、隠退して、今も進者で、このチューリッヒに幸福にくらしているという。

私は事務長からアドレスと名前とをきき、すぐにこの老婦人をたずねた。場所はチューリッヒの中央に近いガルテン街十九番地で、その名前をルイーゼ・クラウゼルという。

あつてみると、クラウゼル夫人は、もう八十歳はすぎている様子である。その心は、私に、慈母観音に接してでもいるかのような気配を感じさせる。その顔は、以前よりも美しさをましてきている。まるで能の面をみるようである。美しい心と美しい顔をもつたこの老婦人から、私は、二十年ぶりで、再び美しい言葉をきくことができたことは、誠に幸なことであつた。